

海

三重県

『海』の舵手と百号への航海

同人雑誌『海』は、一九六六年六月に三重県四日市市で誕生しました。高度経済成長期の真っ只中で、日本初の石油化学コンビナートが出現した四日市では、大気汚染による「四日市ぜんそく」が発生し公害の渦中にありました。

『海』の初代の主宰者は医師の間瀬昇です。『海』創刊と同じ年に市内に内科医院を開き、五年後には同じ市内にも一つの医院を開いて、かけもち診療を行っています。そんな様子を見ると、公害にさらされた当時の市民の健康問題には、相当深刻なものがあつたものと想像されます。

四日市の郊外は、春には暖かい陽差し受けて一面に黄色い菜の花が咲きます。四日市出身の丹羽文雄や伊藤桂一は郷愁の思いをこめて自らの小説にその風景を描きました。

四日市の海から鈴鹿山脈にかけての一带は、温暖でのかな風土と言えます。そこに生まれ育った丹羽、伊藤、田村泰次郎、近藤啓太郎などは、いずれも自然主義的なリアリズムの強い作風ですが、これは温暖で恵まれた自然環境と無縁ではないように思われます。先達作家たちの文学的特質は、『海』を創刊した間瀬昇と、八十三号まで牽引

役を担った一見幸次の作品にも窺い見ることができます。間瀬昇は俳句から出発し、創刊号の編集後記に、『海』は四日市の俳句仲間が「以心伝心のうちに俳句だけでは物足りないものを認め合つて」同人雑誌をやり出すことになったと書き、続けて次のようにも言っています。

「お互い人間である限り『海』を永久に持続させようとは考えていない。文芸に対してめいめいが、現在にそして未来に、あるがままの情熱を注いでゆけば『海』は続き、そしてふくれてゆくであろう。お互いの信頼を大切に、私はおぼつかない舵手の役割を果たしてゆこうと考えている」。

八人ほどの仲間が発した『海』ですが、五十号を迎え



た一九九四年には間瀬昇が急性心筋梗塞を発症して入院し、休刊の誘惑がたびたび彼を襲います。それでも五十号の編集後記には、「改めて諸兄にお願いしておきたいのは、書きたい、書かなければ、という自分の内心の衝迫のこもったものを書いてほしい、ということだ。あまり堅いことを言うことは、現代的でないかもしれないが、誌をサロンやラウンジとしたいではない」と、気を吐いています。

間瀬昇には、私小説的な純文学への思いが格別に強くあり、文学観や作品が同人に与えた影響には大きいものがあります。

間瀬昇に代わって六十八号から主宰となったのは一見幸次で、彼は私小説的味わいを湛えた好短編を多く発表して、常に『海』の中心にいました。しかし一見幸次が残した最大の功績ということになれば、デザイナーとしての力を存分に発揮した『海』の表紙デザインや、海叢書などで示した個性的なブックデザインです。デザイナーとしての才能は、現在でも『海』の表紙の題字の扱いや、目次のレイアウトで知ることができます。

一見幸次の後を継いで八十四号以後は遠藤昭己が編集発行人となり、発行所を四日市からいなべ市に移しました。これまでに九十八号を発行して、百号記念号が目前に近づいています。現在、同人は八名ほどですが、三十六号から掲載同人制となり、作品を掲載したときだけ同人として巻



合評会。左から四人目が初代主宰者の間瀬昇、右へ遠藤昭己、二代目主宰の一見幸次



最近の交流合評会。左列奥から手前に遠藤昭己、宇梶紀夫。右列奥から二人目名村和実、その手前に宇佐美宏子

海 〒511-0284

三重県いなべ市大安町梅戸 2321-1 TEL・FAX0594-77-2770

末に名前を記しています。最新の『海』九十八号には、小説の宇梶紀夫、国府正昭、紺谷猛、宇佐美宏子、遠藤昭己、詩の川野ルナと遠藤、文芸エッセイの久田修が執筆者として

て名前を並べています。掲載は、書いた作品（小説、詩、エッセイ、評論）があればだれでも可能なわけですが、一応、掲載するかどうかについては作品を拝見した後に決定しています。

初代、二代の主宰の時代と比べて大きく変わった点は、これまでややもすれば閉鎖的であった『海』が外に向かって大きく開かれ、外の同人誌との交流が盛んになったことです。その中間に、同人の宇佐美宏子、遠藤昭己が活動する中部ペンクラブがあります。中部ペンクラブでの交流を通じて、愛知や三重の同人誌から参加してもらう合評会も実現しました。『海』からも愛知、三重の同人誌の合評会に参加しています。そして、これらの合評会の様子は常に中部ペンクラブの会報で情報として発信されています。

この紹介文に「文芸に対してめいめいが、現在にそして未来に、あるがままの情熱を注いでゆけば『海』は続き、そしてふかれてゆくであろう」という間瀬昇の言葉を引きましたが、私たちのいまの文学状況を見渡すとき、こうした希望的観測は、やや素朴に過ぎるかもしれません。急激な書き手の高齢化と、それに伴う活力や持続力の衰退と枯渇。これに対抗する秘策はどこにあるのか、百号以後を睨んで仲間とともに手探りしています。

（遠藤昭己）